九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九大図書館蔵『寛文五 乙巳記』 : 翻刻と解題

井上, 敏幸
福岡女子大学助教授

https://doi.org/10.15017/16289

出版情報：文獻探究. 5, pp.36-43, 1979-12-05. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

九大図書館蔵『寛文五 乙巳記』

―翻刻と解題―

井上敏幸

翻刻凡例

○原本通りの翻刻を目ざし、字配り・字高・改行・余白等もできるかぎり原本のままとした。

○丁移りは└1オ／└1ウで示した。

○異体字・略字はそのままとし、他は正字とした。

○仮名遣い・濁点は原本通りとし、判読不能のものは□で原形を示し、推読したものには傍に小さく力と付した。

寛文五

乙巳記

正月　　└表紙

年内立春　　勝興

ふる雪も空にしられてとしの内に花の春たつ色ハ見えけり

歳暮　　同

おしむとて袖こそぬるれ年のくれよせてかへらぬ老のなミたに

歳旦　　同

分てけふ四方ものとかに春ハきぬミちあるミよを空にしらせて

年内立春　　宗好

一年のこよミの面ほともなく見はてぬうちに春ハ來にけり

歳暮　　同

おしまれし月日もともに積り來て跡見ぬ雪に年そ暮ゆく

歳旦　　同

たゝ一夜ちかききのふもけふに明て思へハ遠し古年の空└1オ

（余白）　　└1ウ

元日

温まる今朝やうれしき老の春　　昌程

鶯や音のうちつけに今朝の春　　昌陸

けふよりや心に根さす春の花　　昌勃

長閑也心の空もけさの春　　玄祥

いはゝ此時世やけふの春の風　　仍春

事なしにたつ豊年の始哉　　吉深

去年よりやひたおもむきの今日の春　　昌倫

残る根や今朝の春山門の枩　　玄固

大ぬさと名にたつ枩や四方の春　　時春└2オ

（余白）　　└2ウ

元日誹諧

ふる年の雪や豊年のむ月物　　玄札

君の榮へ年きりせぬや花の春　　未得

ことふきの笛や根あかりの松はやし　　未琢

年徳や家のかさりの女神　　立志

文武固江戸治るや世〳〵の春　　卜養

めん〳〵のほうやつく餅いはふ春　　同

身のいわゐ冨士はいそちの春日哉　　五十歳 南部大膳大夫

かさりわらへ髪置ハ三つの始哉　　藤堂佐渡守

天の戸や明て門出の春霞　　松平采女

立や霞今をはしめの旅衣　　同

いはふ枩や千とせを不老門の前　　神原左京 露夷└3オ

おしたても見事や門の男枩　　稲富次郎左衛門 志計

國民やゆるりくハんふんこねんとう　　西嶋八左衛門

おさまるやこゝまつたいら君か春　材木屋
よろこふや門まつ前のかさり物
不老不思義や若ゑひす　水野半左衛門
富士淺間是や日本のかさり竹　江戸住
年と日の名や門にたつ峯の松　伊豆玉川　庄三郎母
（余白）　└3ウ

正月十一日御城　御會
千世そけに松より分つ四方の春　昌程
氣色豊かに霞む青海　御
鳫歸る八重の汐路に舟うけて　玄祥
明れは音もたゆる浪風　仍春
月うつる真砂の露ハ白妙に　堯盛
なひき相たる庭の小薄　榮誉
折よるや咲し籬の萩か枝　其阿
霜のひま〳〵胡蝶飛なり　昌勃
ウ
靜にもいさよふ野への朝附日　周英
氷くたくる淺沢の水　昌倫　└4オ
霜ふミて誰棚橋を渡るらん　昌陸
風にむかへる駒いはふ声　昌益
（余白）　└4ウ

待花　勝興
咲花を待にハ老もわすられて春ハ日数のいそかるゝ哉
山家月　同
今ハとてのかれし世にもあらなくに思ひし山の月を見る哉
野外雪　同
冬かれの草も見なから武蔵野に哀をそへてふれる白雪　同
武蔵野も末のかきりや有ぬらんかすかに見ゆる山ハ富士のね
野外雪　宗好
降つもるかきりハいつこ白雪に富士もこもれる武蔵野の原
惜名戀　勝興
のかれてもたゝん浮名をいかにせんかくれ家もなき我恋の山　└5オ

海邊眺望　勝興
浦風に心を泛て海士小舟釣せぬ我もこかれ行らん
（余白）

章句
敷徳仁儀席　孔門入学公
（余白）　└5ウ

元日
門松やもとより一よ二本の竹　志斗
年の矢そ一たちと申さはやおと矢　同
丑年歳旦
ちくと雪の殘るハそゆか牛の年　同
春たつといふ斗にや霞めぢぎ　同
くび玉か露もむすひしいぬさくら　同
はゑぬまや無筆といはんつく〳〵し　同
普賢像といへと桜や文珠もく　同
すいつゝの竹のさゝらや花見の座　同
くも舞か竿になひきて歸る厂　同
春弓（定時）やたつをいかけて歸る厂　同　└6オ
暑（未得）をやそのまゝなをすいしやあふき　志斗
酒舟（未得）か一葉見する上戸の目　同

追善
一栄（定時）や一らく葉の木々の枝　同
名月
唐の盤の名月か日々にミつる影　同
高き名や口ことにふくむほう月見　同
名のたつやお月も道の物くるい　同
見るそけに今宵新月無別法　同
月の名ハいつもとたれもいふ曇り　同
名におふ大さかつきの友もかな　同　└6ウ
初厂（未得）ハ四方にわせたの時分かな　同
初厂（同）の一声やこしのかたほゝう　同
おらんだ菊

心当におらはやおらんた菊の花　同
色よきハ此世かいての紅葉かな　同
すまひ草や風にくミあふぼての先　同
秋の野に露いくくたりふ(ち)ぬ(し)はかま　同
ミのりしや口にくふ〳〵しやくしやくろ　同
寺の月にいさ一ふしん申そうす　同

うたいはいかい

山臥をするもかりなりあたかしやう　同　7・オ

霜柱　独吟点取

ひっかすかに鐘つきほうか霜柱　志斗

平砂をてらす寒の夜の月

声氷り飛落鳶も休らひて

明はなれたる村の近邊

我ましと出こそもよへ旅の友

すこしのないにさハきさハかし

ハ専も土用もしるく海の上

っよくいたむハくさるはれもの　志斗

ばらミし内や案し事せし　7・ウ

づくりぬる蓮哥の句鮓たかしや　同

鶏頭の花に似たるハ是いかん汝かんらい紅葉の色　同

黒鴨(抹額)ハ子をかろ〳〵と海邊かな　同

榊原越中守下屋敷本所永代嶋にて

氷り消て波永代の嶋路かな　同

夕顔(紅顔)やむへ源氏ろし花の春　同

霰(玉孔)のふるきハ誰もしやうくわんす　同

花見(木賃)にや下手もつらぬるおか詩哥　同

梅かせん風にちりしく三十六　同　8・オ

初雪のふりける日　松平采女

名をハけふはつとやいはん雪女

巳正月十日の暁夢想

鴻の池に伊丹は梨(ハつく)の小濱かな

右ハ在江戸の時見申候ケ様ニ両様ニ見申候　10・オ

（余白）

二月廿四日大山参詣の時霞河原といふ所にて　8・ウ

折をえて今そ名におふ景色哉霞河原の春の明ほの

旅衣又立歸りきても見ん霞河原の春のけしきを(花のさかりをイ)

霞河原を立出けるに折しも霞おひたっしく

たちて行先も見えさりけれハ

たちこめて里の名かくす霞哉

二月廿五日三嶋明神にまうてっ

神垣の梅やさなから(そのまゝ)手向草

同日天神へ手向に

けふそけにぬさと手向けん梅の花

歸鴈(墓参)　古御名右衛門　重永　9・オ

きのふかも鳴て別ると見し夢のさむる枕に初厂の声

閑鶯　定勝

聞人の春のこっろのっとけさも

われにてしりぬうくひすの聲

川柳

くりかへし見まくほしきハ青柳の

いとのみとりをうつす川水　9・ウ

遠歸鴈

時しもあれ花にわかれて行鴈の

翅吹こすミねの春かせ

花間鶯

朝ほらけ咲そふ花の木のまより

もれてそ匂ふうくひすのこえ

暮春

ちる花をつらしやうしとなけくまに

春さへ暮になりにけるかな

岡郭公

聞あへすいつち過らむほとっきす

岡への松の聲はかりして

江螢　10・オ

むすひおく露の玉江の芦の葉に
ひかりをそへてとふほたるかな

初秋風

色見えぬ松にも秋はしられけるり
きのふハかゝる風のをとかは

こほるゝの袖 珠露

錦にやつゝみあまれる玉とのみ
ミやきか原の蓀の朝露

荻風

さらてたに秋はさひしき風の音を
軒端の荻にそへてきくかな

野徑月

ちりかゝる野への草葉の露なから
袖にやとしてかへる月かけ

舩中月

くたすともおもほえやらす高瀬舟
すむかけおなし水底の月

松雪

しら雪のつもりの浦にいてゝこそ
松ハなくさむものとしりけれ

朝雪

玉すたれかゝけてむかふ朝明の
山の端ちかくつもるしら雪

寄鳥戀

待ふかしあハてぬる夜もあふ夜ハも
とかくかなしき鳥のこゑかな

寄枕戀

まちわふるとしの三とせの後とても
さすかものうき新枕かな

山旅

分まよふむかしおほえて宇津の山
なを袖ぬらすつたのほそ道

10ウ

11オ

夢

まよふ身はあなあさましや一たひも
浮世の外の夢ハ見さりき

曉述懐

昼のまはしハしまきれしうきことの
やるかたもなきあかつきの空

松色春久

年ことにいろまさりゆく松か枝の
みとりに千世の春やふくめる

（余白）

七月廿日、夜本光寺にて花火すまひ
興行の時花火の窗われはねけるに

たてゝ花火われてはね火や二度ひくり
露のたまさか人つとふ庭
にきハひし花火御てらや法の庭
門前くたりおとり子の袖
氣のつまる竹の花火も浮世かな
おとり子ともの心ひろ庭

同時鼠火出けれハ

鼠火ハつなかぬ猫の名たて哉

同時すまひに

足もとのよハきすまひや手取物
勝まけをとり〳〵にいふすまふかな
月にあしあふ寺の門口

同時法師のものよもすからすまふ取けるに

夜通しになけるすまひやけなけ物
おとり子ともを官原の人
勝まけのしれぬすまひや無声音

同時すまふ取もののかたちたいまつこのミけれハ

夜討曽我か明松好むすまひとり
夜討曽我か十番切のせき相撲
なくはちらせ花火の後のすまひ取

梅友
知 友
同
梅友
同
知
友

12オ

12ウ

同
知
友

同
友
同

13オ

かハつかけにあふハむしんなすまふかな　同
勝にけをさせぬや是もせきすまふ　同
たつかたをかてかしとおもふすまひ哉　同
そくらかハつと夕くれの秋　知
よハ手ものを歩に取すてや関相撲　友
八月朔日の夜籠下（かしまって）にて花火
すまふの會ありけるに
一葉の舟ならねとちかちまかな　同　13ウ
たつ方のまくるを見てやせきすまふ　同
八月十五夜名月はれけれハ　同
雲霧も名にあふ空にけおされて今霄さやけき月を見るかな
雲霧ハ今霄の月にけおされて名高きかけを空にしるかな
同時
今霄月の光りあまねき千さと哉　同
月の色も光りをミかくいらか哉　同
同はいかい
月のいもこよひあかるや雲の上　同
月の名もなか〳〵しるき今霄かな　同　14オ
八月廿一日本冒院妙通日性追善
めくりあふけふやかなしき秋の月　同
八月下旬庵原郡の作見にまかりて
日々に雨ふりけれハ狂哥　但八月廿七（ママ）両日辰巳に
あたりてつよくふりけれハ
いつ迄も氣まゝにふれや秋の雨ニハ月の浮名たつミに
同時はいかい　同
ふられてハ秋はてにけり雨の音
寄田戀　同
秋の田のかりそめふしの契りさへ露わすられぬ俤そうき」14ウ
七逆
天有彗星　地有震動　城有雷火　国有耶蘇
僧有空観　儒有泰順　草有灵芝
逆義

公家有武勇　武家有歌道　出家有邪氣
在家有道心
曉　重永
をしまるゝ曉方の詠哉くれしきのふの空のなこりに
山　同
月もよに心ある身も入山はいかなるゆへのあれハなるらん
霞　同
春深き空ハかきりもあらかねのつちとひとつにたつ霞かな」15オ
山　同
言問ん冨士の高ねを見ぬ人ハ世の思ひてのありやあらすや
霜月六日内野正信追善　梅友
ともに見し雲間の月のあへなくも西にかたふく影をしそ思
宇津の山ともに分こし道芝の露と消にし哀世の中　同
冬かれの草葉の露ともろともに消にし跡をとふそはかなき　同
うつの山うつゝに見えし人にさへわかれて遠き世にや住らん　同
同
世の中の定めなきとハしりなから名のミ残し人の哀さ　梅下
是も又なき人数に入相の鐘を間にも袖ハぬれけり　梅友
同發句
袖にをくや忘れかた身と夕時雨　同　15ウ
同はいかい
なき人と聞よりあつと夕時雨　同
十一月十五日昼平岡久兵衛うらの薮のうちにて
水仙花たつねけるにとりあへす
薮の内にありとや人の水仙花　同
同日神原湊にて与四左衛門といふ猟師網引ニ
いてける時とりあへす
門出よしゑものありけり冬の猟　同
同日田子のうらにて
月雪のなかめは物か田子のうら　梅下
よせ歸る波まにふしの影さしてなかめことなる田子のうら哉　同　16オ
由比神原旅亭にて

いさなひて時雨もいさや冬の宿　梅下

月寒わたる庭のかたハら　梅友

玉簾巻手に風のきほひきて　同

なひき相たるかけのくれ竹　下

村鳥のねくら求る声すなり　同

ひかりかすかにうつる半天　友

浮雲ハ見るかうちにしたゝよひて　同

暮かゝりたる峯のをちこち　下

草かりや友さそひつゝ帰るらん　同　」16ウ

はいかい

すみ所もとむとてよるこたつかな　由井町江右衛門 重政

七月廿九日一柳監物身上破滅の時

秋風に一つ柳の葉の露の落て御身にそふ人もなし　卜養

十月比か酒井長門守と依田源蔵縁辺組出入にて

双方改易ニ被ㇾ仰付ける時

結ひをく妻にけんさうせさるまによたをれものとなるそかなしき

同比か谷中感應寺受布施になりける時

谷中もる僧都の身社かなしけれ受布施になれハとふる人もなし」17オ

俳諧發句　稲富二郎左衛門 志計

出ていなはからもかろしといひやせみ　同 閻官左衛門佐 信秋

心なき身にもかんきんハふしきかな

品川にて

海原や山の端遠く出る日の入かたも又武蔵野の原

東路はしめて一見の人同道にて於駿府　昌琢

年毎に見るたにあるを富士の雪またはしめなる人の心は　」19ウ

天と地とひとつに白しふしの雪

俳諧　立志

人せゝるかやくれ〳〵のさし出もの　突言

はいはよな〳〵ひつこミかたき　」18オ

（余白）

十二月五日本修院了義日詮尊霊追善

武蔵野の草のゆかりの露とのミ消にし跡をとふそかなしき

にしの空にかたふく月の影よりも心ほそきはなかき別路

巳卯月江戸下向の時　八王子左衛門 笑吟

富士山と高ねくらへか時鳥　」18ウ

（余白）

（余白）　」19オ

水無月はいかい發句　重由

久方の雲井もひてや水な月

碓　同

もろ極でかた〳〵と打衣かな

きのとの巳のとし

歳旦

天の戸をあけてきのとや年男　ふるかるへし

儒者の御家のとけさやけにころし窓　怪子ノかんなハかうし也

まつかなハ酒に充い日。の花見哉　」19ウ

新宅にて

折をえて花やさくしの家桜

こふしの花見待りて

ひらかぬハ花もやにきりこふし哉　ふるし

更衣

花の香や思ひきりつほの更衣哉

ふし山の雪やもとけんの初音哉　ほとゝきす

涼しさハ不断庭をやはく　ほうき　け　」20オ

此花六月二咲侍る物か

不存候六月ニ咲侍らハ尤ニ候

青天はまこと火宅の住居哉

文月の比江戸衆餞別に

あきあかぬ別れや充とのならひ哉　ふるし

來ても見よ柴かきこしの藤袴

七月

雲はれてきんかと見まくほし月夜

名月

月代を哥せめにせん今霄哉
月代はあたひ千金の今霄哉
老木より習ふ若木のいろは哉

合點四

十月八日　　貞室印

（余白）

冬の比はつき星出ける時狂哥　　松平采女
寒き夜の月のかつらの男だてひかりを見する星いやだまで

在原寺にて

來て見れハその身ハ石になり平のかたミにとてやこつにあり原

（余白）

《解題》

九州大学附属中央図書館蔵『寛文五乙巳記』は、承応二年（一六五三）梅友書写『十五番虫哥合』（請求番号55.4シ33）に合綴されたもので、同じく梅友によって、寛文五年（一六六五）中に書かれたものと思われる。

『十五番虫哥合』は、大本（26.3×18.6）、共表紙全十三丁、墨付十二丁。その奥書には、

右十五番虫歌合ハ灵山長嘯之作のよし
右うた合承応二と廿卯月末つかたうちつゝき雨中にて問ふ
人もなくたゝひとりすこ〳〵と草の庵にとちこもり侍る折
から有かた方もて来り侍るまゝさいわひとよろこひやう〳〵
二ときはかりに書うつし侍るもの也

卯月下旬廿五日　　梅友書之

とある。本文を古活字本および寛永整版本と比較してみるに、直接両者のどちらかによったと決定しがたい程に写しが難であり（全体的に整版に近いと言えるか）、梅友がよったものは、すでに何度か写されたものだったと考えるべきであろうか。

『寛文五乙巳記』は、共表紙墨付二十二丁。表紙右上に「寛文五」、中央に「乙巳記」、左上部にやや小さく「正月」と記す。本書は『虫哥合』と合綴の折（裏表紙の裏打に使用された文書に宝暦十二年（一七六二）役銀云々の文字が見え、この頃以降であることか知られる）裁断されたらしく、一部文字が切れているが、判読にさしつかえはない。

本書の価値は、寛文五年の歳旦作品集（和歌・連歌・俳諧）であること、筆者梅友の創作記録でもあること、さらに著名な作者のこの年の作品記録であることに求められるが、そうした点と同時に、本資料が、寛文五年の文学状況、近世初期から中期にかけての韻文学の状況を具さに伝えているものであることにも充分注目しなければならないように思う。つまり、この期の一般的な文学愛好者にとって、和歌・狂歌・連歌・俳諧は、それぞれがそれぞれの文学として創作・享受されたのではなく、むしろ同一ジャンルのものとみなされていたのではないかということである。慶安五年（一六五二）から寛文六年（一六六六）までの歳旦作品を集めた知足書留『歳旦帖』（天理綿屋文庫蔵）が、本書と同様に、俳諧のみではなく、歳旦和歌・連歌を多数含んでいたことの意味も、やはりこうした視点より再考されねばならないであろう。

筆写者梅友がどのような人物であったか確証を得ないが、本書の記事、人物関係からみて、江戸住の幕臣、それもむしろ下級の武士で、駿河地方に役職を得ていた人物だったらしい。梅友の作は、和歌（ただし、作者名なし）・連歌・俳諧・狂歌のすべてにわたるが、それらの詞書をたどってみると、七月二十日、江戸の本光寺（現南品川一丁目）で「花火すまひ」を見ており、八月一日、同じく江戸の鹿島大明神社（現品川区大井町鹿島町）の「花火すまひ」も見ている。「八月下旬庵原郡（駿河国）の作見にまかりて」という詞書があり、その折、田子の浦、由比、神原を泊り歩いている。これらのことから、梅友が、江戸住の幕府の下級武士だったことだけは確かであろう。

本書には駿河関係の武士が多い。元旦俳諧発句を残してい

る榊原左京露吏は、名を久近といい、榊原越中守照久（本書の志斗の俳諧発句の詞書に「榊原越中守下屋敷本所永代嶋にて」とあるその人物）の三男で、家綱の小姓となり、四百俵をもらい、この頃は中奥の番士を勤めた人物であった。延宝二年歿、三十七才と伝える。父越中守照久は、久能城城番であり、駿河国有渡郡で千八百石を有した。母は、閑宮左衛門信繁の女で、本書に和歌一首を載せる閑宮左衛門作信秋とは血縁者だったかと思われるが、『寛政重修諸家譜』に信秋の名は見えない。なお信秋の歌は『和歌視見集』に見える。本書に和歌五首を載せる古郡文右衛門重永は、駿府御代官を命ぜられた古郡家の一員だったらしい。『駿国雑誌』によれば、古郡家二代目文右衛門重年は、寛文四年十二月にその役職を継いでいる。あるいは重年の雅号が重永ではなかったか。重永の歌は『正木葛』『紫の一本』（ただし活字本では古部、某文右衛門）等に見える。梅友の文学活動の基盤に、こうした駿河関係の武士グループがあったこともまた確かであろう。

江戸のグループには、本書に俳諧発句二と狂歌一首を載せる稲富次郎左衛門がいた。『寛政重修諸家譜』によれば、稲富家は火術でもって幕府に仕え、志計はその三代目で、五百五十石であった。寛治二年に遺跡を継ぎ、寛文七年大番、元禄十年、六十一才で没した。こうした梅友の環境が、おのずから南部大膳太夫重信（元禄十五年歿八十七）・藤堂佐渡守高通、俳号未判（元禄十年歿五十四）・松平采女（信興）（元禄三年歿六十）・忠利（元禄元年歿八十四）・息忠勝（享保三年歿八十）のうちの誰れかかの）らの作品を記録し、また水戸光圀に仕えた岡本宗好の和歌、勝興の和歌（茂睡の『鳥之跡』に出る上遠野櫂左衛門勝興と同人か）を収めることとなり、さらには玄札・未得・卜養らにも接していくことになったかと思われる。卜養の狂歌（「七月廿九日一柳監物身上破滅の時」―『徳川実紀』寛文五・七・廿九の条参照。「十月比か酒井長門守と依田源蔵縁辺組出入にて双方改易ニ被仰付付る時」―『徳川実紀』寛文五・十一・四条参照）に対する興味の持ちかた、また、正月十一日御城御會運歌や、吉深こと獄屋奉行石出帯刀の運歌に対する興味も同根だったといえよう。

なお、本書の和歌・俳諧作品に、当代一流人の加点があることも（俳諧は、玄札・未得・貞室・定時、和歌は宗好か）、本書の価値を高からしめるものである。なお、志斗に加点している定時は、貞徳門、初め紀州和歌山住、のち江戸住で、その経歴が高井立志に似ている点が注目される。

不充分な調査のままに解題の筆をとったことを御許し頂きたい。最後に、資料紹介を許可された九州大学附属中央図書館に対し衷心より御礼申しあげる。

――福岡女子大学助教授――